

2022年4月10日 説教『ゲッセマネの祈り』

高橋克樹牧

師聖書 イザヤ50章4〜7節、マルコ福音書14章32〜42節

マルコ福音書9章2〜10節で取り上げた聖書個所でイエスは、天に近い場所を象徴する山上において栄光に輝いていました。モーセとエリヤと話し合うイエスの姿は、弟子たちにローマ帝国の支配とは異なる神の国の到来を力強く感じさせたことでしょう。しかし、ここでの主イエスはひどく恐れ、怯えています。しかも、その姿を弟子たちに隠そうともせず、ここを離れず、目を覚ましていることを求めます。苦悶するイエスの姿から目をそらしてはならないと言うのです。『死ぬばかりに悲しい』（34節）とまでイエスが言われたその「悲しみ」とは何であったのか。それは現代人の多くが捨ててしまった悲しみではないだろうかと思わされます。多くの現代人は神との関係において自分を見定めることをしなくなつたために、神と断絶していることにも気づかず、自分個人の悲しみに捕らわれてしまい、本当の悲しみが神との関係性の喪失にあることを忘れてしまつていることに原因があるのではないかと思わされるのです。イエスが「死ぬばかりに悲しい」と言つたのは、弟子たちが自分たちの栄光ばかりを考えていて、神との関係に生きることを忘れていたからです。それは多くの現代人と同じです。

ウクライナ情勢を見てみると、心の痛む事実が次から次へと明らかになつて来て、戦略核兵器を使う危険性まで取沙汰されています。もし、それらを黙認するならば、神が造つた被造世界を破壊することを認めたことになります。そして、被造世界が破壊されたら、神と人間の関係に根拠をもつて成立している人と人との関係も、国と国との関係も崩壊させることになります。神との関係に深い断絶があり、深い溝がある。だから、そこには本来的に神の悲しみがあるのではないか。それにもかかわらず、『人間は悪くない、自分は悪くない。悲しみは必要ない。悲しんでいたら前へ進めないだろう？』そこに留まつてはならない』と、私たちは自らを叱咤激励するばかりで、神御自身の悲しみを見ないようになっているのではないか。

35節をみると、主イエスは『地面にひれ伏して』祈っています。これは常套な姿ではありません。本当は負うことができないものを背負うことをしようとしている姿です。『この杯を取りのけて下さい』（36節）と祈つたということは、主イエスが極限にまで追い詰められたことを示しています。しかし、主イエスはその杯を放り棄てはしなかった。それは、神がこの自分を放り棄てなかつたことをも意味しています。そこに私たちの救いがあるのです。

ゲッセマネという場所はキドロン谷の東の高台にある園です。そこにイエスはペトロとヤコブとヨハネを連れて行きます。なぜ、この三人なのか。それは山上の変容の姿を見た3人に、主イエスの後の苦難の姿を見せるためですし、神御自身が御子イエスを十字架につける道を選ばれたからです。そこに神の悲しみがあります。イエスはかつてヤイロの娘を生き返らせたときに、この3人を同行しました。山上の変容でもそうです。イエスの変容の場面では、モーセとエリヤが天から現れ、神の声がイエ

スは神の愛する子と宣言しました。これは3人の弟子たちが、イエスが神に祈りをささげているのを目撃しているときの出来事でした(マルコ福音書にはないが)。ゲッセマネにおいて3人の名前を見て、変容の出来事を想起した読者は、神がイエスを見捨てず、やがてイエスをモーセやエリヤのように、天上で栄光に満ちた地位に引き上げることが確信します。

しかし、そうではなかった。神の悲しみを知らない3人は、神はイエスを見捨てたのではないかと受け止めました。そのような悲しい現実をもしかしたら3人は本能的に受け止めることを拒絶したのかもしれない。

現実生活で生きていくことは厳しいかもしれないけれども、希望を持つためには悲しみに留まらないで生きていくべきだ。そういう思いがイエスのゲッセマネでの祈りを正視することができなくさせたのではないか。

34節で『悲しい』と訳された語は、詩編では苦難の義人の嘆きの歌にも用いられています(42編6節、12節)。その悲しみを直視するために『目を覚ましていなさい』(34節)という命令は、文脈では3人に向けられたものですが、マルコ福音書を読む者すべてに対して向けられています。すでに読者は、マルコ13章37節で『あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい』という言葉を知っているからです。しかも、本日のテキストでは、死を前にするイエスの悲しみを知りながら、目を覚ましておくこともできず、イエスのために祈ることもできず、彼ら弟子たちはだらしなく眠りこけてしまうのです。人間としてはあまりに「弱い」。しかも、そのことが3度もイエスによって確認されるのです。ゲッセマネの直前のテキストでは、イエスがペトロの離反を予告していますが、そこでペトロが3度もイエスを否認することが物語られる。それに対してペトロは『あなたのことを知らないなどは決して申しません。皆の者も同じように言った』(31節)のです。これは神の子イエスと人間との関係性を自ら断たないという宣言なのですが、現実には弟子たちは皆十字架刑死の前に逃げてしまっ、イエスとの関係を捨てたのです。

イエスが神の国に入るとき、自分たちに最も栄光に満ちた最高の地位を約束してくれるように要求しました(10章37節)。そのヤコブとヨハネに対して、苦難の杯を飲むことになることと語ったイエスの警告(10章39節)がここでも忘れ去られているのです。3人の弟子はイエスが祈る姿を直接目撃できる距離にいて、いままさにイエスの杯にあずかるのを目前にしているのに、眠りこけています。一度ならず三度まで眠りに落ちていく(37節、40節、41節)。確かにイエスの死は理不尽な死の典型です。人間には予測できない側面があるかもしれない。しかし、被造物である人間の生というのは、神によって創造されたものです。神が人間を創造したということは、最初から人間は神との関係の中にあるということです。私たち人間が存在するということとは関係の中にあることです。神は創造したものととの関係を「創造したらそれで放つたらかし」にはしません。神は人間に語りかけ、人間はこれに応えていく。神と人間とは応答関係にあるのです。つまり、人間が生きるということは、単純に人間が自分の意志だけで生きるのではなく、「自分が神と共に、他者と共に生きる」とい

うことなのです。神は生きて人間に働きかけて下さるということ、神が人間との関わりの中にあつて語りかけられ、必ず人間の側も神に対して応答するということなのです。

創世記では、カインに殺されたアベルの死後のことについて具体的にはなにも語られていません。しかし、理不尽に殺された者がそのまま無に帰するのではないのです。永遠の命に入るということは、死によっても神との関係性が断たれることはないということ、神の力によつて、復活させられ、再び神との関係へと戻つて行くことを言っているのです。それが復活の出来事なのです。新約聖書では、イエスの十字架刑死がもつとも理不尽な死です。ユダヤ人にとつて十字架刑死は呪われた死であつて、神との関係が断たれた死なのです（申命記21章23節参照）。イエスが昇天して神の右に座したという信仰告白は、神との関係を回復したということなのです。

私たちは神との関係を断つていることに気づかないで生きていけると言えます。現在の日本のような閉塞状況の中で生きていけると、人は知らず知らずのうちに自分の狭い世界の中での価値観で、物事を判断してしまいがちになります。そして、神との関係性を断絶させていく。しかし、私たちの信仰はいかなる死によつても神との関係が断ち切られることはないということを示しているのです。ゲッセマネの祈りは、イエスが神との関係性を捨てないように祈ったことを私たちに教えていますし、その祈りがあるからこそ、人間の側がたとえ神との関係を切り捨てたとしても、このイエスの祈りがあるからこそ神は私たちの誰一人として見棄てたままにはおかれなのです。その恵みに感謝してこの一週も生きていきましょう。